

9月の行事予定 26日正副会
10月の行事予定
14日 上半期常務会
20日 上半期理事会

12月末日でタイムズを解約する方は、11月12日までに組合事務局に連絡をお願いいたします。

9月組合の異動
8月末日組合員総数257社
9月末日組合員総数257社予定

豊洲市場卸7社、年末商品合同展示会を開催 年末商戦盛り上げる 9月9日水経新聞

東京・豊洲卸7社は8日、豊洲市場の水産卸売場棟3階塩干加工品荷置場で「年末商品7社合同展示会」を開いた。「中東情勢を踏まえた物流・資材費高騰、人材不足への対応」を展示会のテーマに掲げ、各社が趣向を凝らし、厳しい事業環境の中でも年末の売り上げの確保・伸長につながるよう構成を考えた。スローガンは「『逆境を変化の力に』—食品流通の新時代を豊洲から世界へ発信」。会場では、ねり製品やカニ、エビなど定番商品が並んだほか、動画などを流すディスプレイの設置や正月デザインの華やかなパネル装飾、商品をより魅力的にみせる照明なども新たに取り入れるなど、各社、正月商戦を盛り上げた。展示会開会にあたり、築地魚市場（株）の山崎康司社長は「9月に入り、今年もあと4か月。テーマに沿い、恒例の年末展示会を開催する。厳しい環境の中、解決していかなければならない課題が山積し、水産業界も例外ではない。逆境を乗り越えるためには大きな変化も必要。ピンチをチャンスととらえ、各業界が英知を持ち寄り展示会を成功させたい」とあいさつした。中東情勢に伴う包装資材の値上がりや輸入原料高、資源の減少などを背景に秋冬に引き続き、製品値上げが相次ぐ年末商戦。メーカーもできるだけ製品値上げ率を抑えようと、包装資材の見直しなどを図る企業努力もみられた。また、おせち商材の定番である魚卵が相場高となるなど、水産原料全体に割高感が漂う中、扱いやすい相場のエビやタラコなど、値頃感のある商材も存在感を高めそうだ。

サバ情報 ノルウェー巻網、枠の4割を消化 近場で品質良好 9月9日水経新聞

商社筋によると、シーズン真ただ中にあるノルウェーのサバ漁は先週、2万3000トンほどの漁獲があり、枠の消化率は4割超に達した。時期的に餌食いはあるものの脂乗りはよく、引き続き魚体および品質は良好なようだ。

(右欄上に続きます)

ただ価格については、前週よりもさらに上昇。為替の上下もあるが、内販換算で1000円オーバーと依然、最高値圏で推移している。現時点で8月24日の大型船の操業開始以降、約2週にわたり多少のムラはあっても、水揚げは一度も途切れずに継続している。漁場はまだ加工場から近く、鮮度のよい魚体が手に入りやすい状況が続く。先週は加工場が集積するオーレスンから北西140～170カイリの間で単発的に魚群が発見され、平均サイズは522グラムと近年としては比較的大型が多かった。対して沿岸で稼働する小型船は苦戦しており、先週の実績はわずか190トンだった。サイズも平均273グラムと小型で、順調な大型船と対照的な結果になっている。一方、今週末はシケの恐れがあり、水揚げの停滞も予想される。現在は一部漁場が南西方向に移動する傾向も確認されており、このまま進むと、例年通り来週からは英国領での操業も始まっていきそうだ。

8月の国内生鮮大物 豊洲 天然マグロ 75%減少 9月10日水経新聞

(株)時事通信社が集計した東京・豊洲市場8月の生鮮大物売場、国内物の入荷本数は、前年同月比34%減の746本だった。マグロ（クロマグロ）の天然物と養殖物は減少したが、メバチとキハダは増えた。マグロ全体の入荷本数は71・5%減の225本。このうち天然物は75・2%減の159本で、8月としては過去10年間で最少だった。まき網物が、イワシなど青物狙い船の混獲物とされる銚子産が6本（前年同月1本）のみに急減して、例年なら漁期後半でコンスタントな水揚げがある塩釜などの宮城産の入荷が途切れた（263本）ことが大きく影響した。また、前年に8本あった北海道産も入荷がなかった。まき網以外でも、定置物を主体とする噴火湾などの北海道産が97本（237本）、釣り物を主体とする小泊や大間の青森産が43本（102本）と急減した。月間を通じて極めて低調な出回りとなった状況について卸会社では「台風や前線の影響から各地で操業見合わせや漁薄が続いたため」と話している。

(次ページ左欄上に続きます)

サイズ別のセリ値（発表値の平均）は、はえ縄や釣り、定置物などまき網物以外の大型（100キロ以上）がキロ5771円で11・8%安、中型（100キロ未満、40キロ以上）は5955円で10・9%安、小型（40キロ未満）は5115円で41・5%高だった。まき網物は大型のみで2500円、46・3%安だった。月間の最高値は、4日に入荷した北海道・噴火湾産の定置物（66キロ）で、中型サイズとして異例の1万5000円だった。養殖マグロのセリ場売りは66本（前年同月147本）と55・1%減少した。主力の長崎産が13本（108本）と大幅に減少したことが要因。このほか、鹿児島産8本（26本）、高知産4本（9本）も前年を下回った。一方、三重産は34本（3本）に増加。奄美産3本（1本）、島根産3本（なし）、京都・伊根産1本（なし）なども少量ながら増加、入荷再開となった。セリ値は、三重産の50～36キロ物4本が珍しく公表され、3000～2500円だった。なお、このほかは未発表だったが、実勢取引価格は70キロ以上が3800～3700円程度、50キロ以上が3600円前後、40キロ以下は3400～3300円程度のもよう。メバチ全体の入荷本数は191本（145本）と31・7%増加した。はえ縄物は、塩釜や気仙沼の宮城産が119本（3本）に増加したが、和歌山・那智勝浦産は4本（121本）と大幅に減少した。今年は珍しく、カツオ漁船の混獲物とされるまき網物の入荷がまとまり、房州勝浦産が40本（なし）、塩釜産が16本（なし）入荷して全体の入荷を押し上げた。はえ縄物のセリ値の平均は2023円で37・1%高。まき網物のセリ値は1477円で7・7%安だった。まき網物は相場は伸びなかったが「身色がきれいでちゃんと使える魚」（有力仲卸）と評価はよかった。キハダは330本（前年同月196本）で68・4%増加した。大半を占めたまき網物が急増したことが主な要因で、銚子産が167本（75本）、房州勝浦産が151本（なし）とまとまった。なお、三重・南島産は5本（10本）と少なく、前年に77本あった宮城産も1本のみだった。はえ縄物は5本のみで、三宅島産が4本（なし）、神奈川産が1本（なし）と低調だった。発表されたセリ値の平均は、まき網物が1668円で65・1%高。競合する赤身系天然インドの減少場面などで引き合いが高まり、上品には2000円前後の好値も付いたが、

(右欄上に続きます)

身焼けを懸念する慎重買いがあり、セリ残りも多かった。はえ縄物のセリ値の平均は1260円でまき網物を下回った。なお、1本（35キロ）のみだが、高知産から養殖物が入荷した。マグロのイケスに迷い込んだ例外的な生産魚らしく「脂乗りはたいへんよい」（セリ参加者）と好評だったが、セリ値は付かなかった。

8月の輸入生鮮大物 豊洲 天然インドマグロ、クロマグロ増加 （株）時事通信社が集計した東京・豊洲市場8月の生鮮大物売場、輸入物の入荷本数は3261本で、前年同月に比べ44・9%増加した。天然マグロ（クロマグロ）とインド（ミナミマグロ）が順調に数を増やしたが、メバチは減少した。マグロ全体の本数は770本（前年同月386本）でほぼ倍増した。国内天然物の急減を受け、北米物を筆頭に積極的に集荷を継続した結果、主力のカナダ産が495本（265本）、ボストン産が120本（59本）に増加した。オセアニア方面からも豪州産が123本（28本）まとまった。なお、豪州産はインドと同一漁場で漁獲されており、「海流の変化でインドの漁場にマグロの群れが流れ込んだ可能性が高い」（卸会社）という。養殖物はメキシコ産が24本（前年同月20本）と前年並みで、このほかモロッコ産が2本あった。モロッコ産養殖物のセリ場売りは、築地市場時代を含め、記録が残る1998年以降で初の入荷となった。

国内物の品薄から北米物の販売はおおむね堅調。ただし、両産地とも銚（もり）傷の目立つ並品も多く含まれ、セリ値は、カナダ産は高値がキロ1万4500円（前年同月1万9500円）で、平均値は6377円（7755円）と前年を下回った。ボストン産は高値こそ1万6000円（1万3500円）と、国内物を上回る月間の最高値にまで達したが、平均値は6646円（7258円）と、こちらも前年を下回った。円安や燃油コストの上昇から、セリでは「極端な安値で応札しない方針」（卸関係者）だったが、下旬に差し掛かるにつれ徐々に過剰感も出始め、最終的に安値はカナダ産で4000円、ボストン産で4500円と、前年と同値に落ち着いた。豪州産は40キロ台の中小型の割合が高かったが、高値は1万2500円（前年同月1万2000円）、平均値は3892円（3792円）と前年並みだった。養殖物のメキシコ産は卸1社のみの扱いで、すべて80キロ前後のサイズで統一されていた。

(次ページ左欄上に続きます)

相場は全数未発表だったが、国内養殖物のセリ場売り減少もあり、3000円前後で買い手が付いたもよう。インド全体の本数は2449本（1704本）で43・7%増加。いずれも天然物で、主力の豪州産が2046本（1199本）に増加したほか、ケープタウン産も59本（28本）に増加した。一方、ニュージーランド（NZ）産は344本（前年同月477本）に減少した。豪州産は現地の豊漁に加え、主要輸出国である米国の需要の頭打ちなどから、日本向け出荷が増えたとみられる。同産の魚体評価について「今年は脂乗りのよい上品と、鮮度や身色で劣る並品との格差が大きい」（仲卸業者）と品質の二極化を指摘する声が聞かれた。この結果、豪州産のセリ値は、高値が8500円（前年同月8300円）とやや上伸したが、平均値は3359円（4638円）と1300円近い大幅な下落。ただしこれは、今年は冷凍インドやメバチが品薄高という背景もあり、代替商材として買参業者や量販筋が割安な赤身系並品を積極買いする場面が見受けられ、この一部が今回は相場発表されたことで、実勢取引以上に平均値の値下がり強調されたもよう。メバチ全体の本数は35本（159本）に減少。産地は豪州とケープタウンのみで、主力の豪州産は32本（137本）に急減し、ケープタウン産は3本（3本）と同数だった。豪州産のセリ値は、高値が4400円（4600円）とやや下げたが、平均値は2088円（1699円）と上向いた。これは、入荷タイミングが同産インドの入荷切れ日と重なったことや、比較的身質評価の高いパース水揚げの魚が少量ながら含まれていたことで平均値が上伸した。

【さかなの動き】道秋サケ 雌雄2~3割高
発進 産地、消費地とも苦慮 9月10日みなと新聞

北海道秋サケ新漁が9月から始まった。昨年は過去最低の不漁だったが、今期の来遊予測はさらに半減する厳しい見通し。不漁を想定し、浜相場は高値スタートとなっている。えりも以西海区日高地区などを皮切りに1日から水揚げが開始。今期も親魚確保のため河川遡上（そじょう）を促す自主規制が行われ、全海区が出そろうのは9月2週目。道漁連日報によると、9日現在の累計漁獲量は前年同期比32%増の752トン。まだ序盤だが、太平洋側やオホーツク方面の出足が昨年に比べて良いとはいえ、市況は強含み。

9月上旬の全道大相場は雌でキロ2000円台前半、雄で1100~900円中心。雄雌とも前年同期に比べ2~3割高で推移する。生鮮需要を軸にしながらも、加工向けの原料確保の動きも重なり、漁の先行き不安が浜高を誘引する。そのため消費地市況も高止まりする。9月上旬の札幌市場の卸相場（1尾発泡箱入り）は、雌3キロ上で2200~1800円中心、雄は3キロ前後で1500~1100円中心。「ほぼ浜値と変わらない。運賃、箱代を加味するとなかなか厳しい商い」と卸。水揚げ好転と市況軟化が待たれる。

大雨・高水温で鮮魚不足 大阪本場 9月上旬の
入荷量3割減 豊洲も減 9月11日水経新聞

大阪市中央卸売市場本場における9月上旬の鮮魚入荷量が、前年を大幅に下回っている。1~8日の営業日6日間の入荷量は合計755・9トンとなり、前年同期の1110・0トンに比べ31・9%も減少した。西日本の沿岸は総じて海水温が高く、迷走台風や秋雨前線停滞、それに伴い災害級の大雨が続き、各地で操業もままならない状況が続いた。昨年は道東のサンマの入荷で助かったが、今年はそれさえない異例の状況が続く。量販店・スーパーや小売店では一般鮮魚の入荷が薄く、養殖魚や冷凍解凍品、塩干品で不足を補完するよう動いている。しかし、鮮魚がない状態が長引き過ぎて来店客はほぼこれらの魚介類を購入済みで、仕方なく畜肉などヘシフトをしているといった話も聞かれる。大阪本場の鮮魚入荷量を営業日別にみると、6日間すべてで前年の入荷量を下回った。1日は124・7トンで前年の196・7トンから36・6%減少。特に営業日で3日目となる4日は111・3トンで、前年同日の214・4トンと比べ48・1%の減少となり、前年からほぼ半減した。営業日で6日目の8日も4割強の減少となった。6日間のうち3日間で前年同期比35%以上の減少となり、9月上旬の入荷低調が目立っている。日別入荷量では、今年は営業日2日目の3日が159・5トンで最多となったものの、前年の同日に比べてわずかに下回った。前年は営業日3日目の4日が214・4トンで最多となっており、今年は前年のピークを大きく下回る水準で推移した。今期は各地で線状降水帯が頻発しており、十分な操業ができておらず天然魚がとにかく集まらない。大阪本場だけでなく関西の各市場も軒並み入荷減に苦しむ。今後の入荷回復に期待をかける。

豊洲サンマで8割減 東京・豊洲市場も厳しい入荷状況に直面している。都の調べによると、鮮魚入荷量は1～8日の6営業日で2637・3トンと15・1%減った。サンマに限れば152・8トンで79・0%減だ。秋サケも含め秋の魚が薄いうえに、西の大衆魚が高海水温や天候不良で振るわない影響で穴埋めできなかった。アジが十分でなく、ブリ類のワラサも半減。九州・山口方面の赤物入荷も大きく減った。伊豆諸島の大雨の影響で島周りからのキンメ入荷も低調で、大阪本場ほどでないものの大幅に数量を落としている。1日に各地で解禁となった「底びき網漁の魚を積極集荷」（豊洲卸）することで、特種物（高・中級魚）は何とか形になっているものの、サンマや秋サケの劇的回復については望みが薄く、養殖魚も飼料高騰などで価格修正が進む中で、鮮魚全体の集荷では難しいかじ取りを迫られている。後半に控えるシルバーウィークの大型連休に備えるためにも、秋雨前線が通過後の各地の海から十分な水揚げが集まることが強く望まれている。

『こちら漁況情報部』生鮮釣カツオ 8月水揚げ量9%減 巻網漁は伸び5000トン 9月11日みなと新聞

漁業情報サービスセンターによると、8月の生鮮釣カツオ水揚げ量（速報値）は、前年同月比9%減の2671トンだった。同月の主な漁場は三陸北部～東北北部沖。同月は生鮮巻網で4983トンの水揚げがあり、同センターは「生鮮カツオとしては、前年の不漁を巻き返す勢いの水揚げだった」とした。生鮮釣カツオの主な水揚げ港は宮城・気仙沼の2152トンで、同月全体の8割を占めた。気仙沼におけるサイズ組成は、2・5～3キロが主体（54%）で、3～4キロ（24%）、1・8～2・5キロ（21%）が続いた。他のサイズはごく少量という。三陸沖などで漁獲される秋のカツオは脂のりの良い「戻り」と呼ばれ、旬商材として人気は高い。「今年は東北海域で漁獲の主体となる“戻りカツオ”になる群れが来遊している」と同センター。9月はさお釣による水揚げが安定して継続するとみる。魚体は引き続き2・5～3キロ主体で、成長して3キロ以上の水揚げも増える見込み。9月上旬現在、巻網はマグロ類を狙い、別の海域で操業する船もある。同時点では水揚げは多くないが、同センターは「巻網も継続して水揚げがあると思われる」とした。

【さかなの動き】ノルウェーサバ 新漁期の本格操業遅れ 今期枠半減8万トン 9月10日みなと新聞

ノルウェー水産物審議会（NSC）によると、8月のノルウェーの冷凍サバ輸出は前年同月比60%減の4926トン、49%減の2億3600万ノルウェークローネだった。輸出先国上位は中国、ベトナム、日本。うち、日本向けは71%減の672トン、11%高のキロ44・12クローネ（約733円）。中国向けは42%増の900トンと急伸した。今期のノルウェーの漁獲割当は前年比半減の8万1375トン。8月から今期漁が入漁したが、大幅減枠により本格化が遅れている。現地生産者は「ノルウェー国内の生産者で、労働者を解雇する企業も出ている。サバ資源が回復するまでニシンに切り替えるなどで何とか乗り切る」と話す。8月の600グラム以下の冷凍ラウンドサバの輸出キロ単価は46・46クローネ（約772円）と、最高値を更新した。国内の加工筋は「5月中旬に日本着値がキロ1000円を超えた。8月から入漁する新物はさらに値が上がる」と、高値を警戒する。

ノルウェーから日本へのサバ輸出				
	数量(トン)	前年比 (増減率)	キロ単価 (NOK)	前年比 (増減率)
25年				
1月	721	▲51%	27.98	23%
2月	384	▲76%	29.03	28%
3月	943	▲3%	28.7	22%
4月	720	▲6%	27.74	20%
5月	365	▲55%	26.23	20%
6月	322	65%	26.6	25%
7月	312	15%	27.13	20%
8月	2,329	17%	39.86	52%
9月	11,932	▲29%	42.4	56%
10月	4,769	▲76%	46.14	71%
11月	2,053	▲68%	45.09	66%
12月	2,173	28%	46.7	67%
累計	27,022	▲49%	41.37	56%
26年				
1月	408	▲43%	44.75	60%
2月	548	43%	41.11	42%
3月	362	▲62%	41.4	44%
4月	120	▲83%	43.8	58%
5月	144	▲61%	43.82	67%
6月	367	▲14%	42.82	61%
7月	491	49%	42.9	58%
8月	672	▲71%	44.12	11%

サバ情報 北欧の資源1割回復 依然少なく国内反応さえず 夏季生態調査 9月11日水経新聞

ノルウェー、アイスランド、フェロー諸島、デンマークの研究チームはこのほど、6月末から7月末にかけて北欧海域で実施した夏季生態調査の速報を公表した。注目のタイセイヨウサバについては総資源量が前年比10%増のおよそ180万トン、尾数換算では36%増の52億尾と推定された。

引き続き低水準だったが、調査開始以来で最低だった昨年に比べて回復がみられた。国際海洋探査委員会（ICES）の漁獲枠勧告の根拠として利用される調査で、2027年枠は今年30日に公表される予定となっている。サバの分布範囲は25年とほぼ同様だったが、近年目立っていた魚群密度の低下傾向に改善がみられた。成魚の魚群が最も濃かったのはノルウェー海南中部の東側、北緯62～68度で、漁獲された魚体の平均サイズは431グラムとなり、例年通り北に進むほど大型化する傾向がみられた。また、今後の資源量を左右する1～3歳の若いサバの密度は昨年よりも増加し、組成比率は2歳魚、6歳魚、3歳魚、7歳魚の順に多かった。これらから算定されたICESが重要視する2歳魚の加入指数は前年比1.9倍の32億尾で、過去10年で最低だった24年の9億尾を底に持ち直しが続いた。

相場影響なし 去年は同速報の結果が悪かったため「禁漁になるのではないかと」の臆測が拡散し、相場にも大きな影響を与えたとされている。ただ今年はポジティブな内容となったものの、国内勢は「減るよりはよいが、若干回復してもまだ近年としては少ない」とさえない表情のままで、操業中の新物価格にも「影響はないだろう」との見方が多い。また「漁獲国は今年も結局、当初の勧告を守らなかった。ICESとしては容易に枠を増やせないのではないかと」などの声もあり、実際に資源が増えたから増枠になるという保証がない中、依然として楽観できない状況が続いている。

ニシンは3割増 一方、サバの代替として日本でも引き合いが伸びているノルウェー春産卵（NVG）ニシンの調査報告もあり、総資源量は28%増の585万トンと予想された。資源評価には使われないデータだが、サバと同じく若い魚体が多く、4～5歳魚が半数以上を占めていた。また、白身魚のブルーホワイティング（プタスダラ）についても総資源量は14%増の275万トンで、1歳魚が資源の大半を占める良好な内容だった。

家計支出調査7月 魚介類、実質6.1%減

アジ、マグロ、刺し盛り低迷 9月15日水経新聞

総務省は4日、家計支出（家計調査報告、2人以上の世帯）の2026年7月分を発表した。

消費支出全体は前年比で実質（消費者物価指数で補正して比較）3.6%減で8か月連続の減少だった。食料は調理食品や飲料の低下で実質1.3%減と2か月連続の減少。魚介類は実質6.1%減と振るわなかった。魚介類の支出金額は5683円で、実質減は9か月連続。名目は2.3%増で7か月連続増だった。内訳は、生鮮魚介類が3008円で実質7.8%減（名目3.6%増）、塩干魚介類が1124円で実質5.7%減（名目3.0%増）、魚肉ねり製品が671円で実質8.0%減（名目3.6%減）、他の魚介加工品が880円で実質1.5%増（名目2.1%増）。魚肉ねり製品が名目減となるのは5か月ぶり。生鮮魚介類のうち支出金額が50円以上あり名目増減（以下のカッコ内はいずれも名目増減）が目立ったのはアジ（19.1%減）、マグロ（10.2%減）、刺身盛り合わせ（7.9%減）の3品目。アジは漁獲減、マグロは相場高が消費を冷やした。刺身盛り合わせは主役のマグロの不振や現場の切り手不足が関係しているとみられる。一方、支出金額が50円以上ある中では、カニ（147.6%増）、タイ（35.3%増）、カツオ（19.7%増）、タコ（20.8%増）、サケ（12.0%増）が2ケタ増となっている。

ウナギ蒲焼は微増 塩干魚介類の支出金額の品目別名目増減は、干アジ（22.0%増）、シラス干（16.4%増）、塩サケ（10.2%増）がいずれも2ケタ増だった。魚肉ねり製品は他の魚肉ねり製品（14.7%減）で大きく落ち込んだ。ウナギの蒲焼は946円で名目1.3%増の微増止まり。値頃で購入量は伸びたが、16年7月（1012円）以来となる購入額の1000円超えには至らなかった。

【さかなの動き】九州サバ 松浦8月水揚量10倍 異例の好漁、高値続く 9月14日みなと新聞

西日本大中型巻網（西巻）による松浦魚市場（長崎県松浦市）へのサバの8月水揚量は、前年同月から大幅に増えた。サバは例年、海水温上昇に伴い魚群が薄くなるが、今夏は異例の好漁が続いている。同市場卸、西日本魚市の同月取扱量は、サバが前年同月比10倍の5万968箱（1箱17キロ）、平均単価は26%高の6271円。夏場は通常、「餌食い状態」の上、身痩せで鮮魚相場が安くなるのが通例だが、今夏は高値で推移。量額とも異例の状況となっている。

相場の良さと魚群のまとまりから大中型船はサバを主体に操業。半面、本来旬であるアジは2320箱と極端な不漁で、サバへの集中が際立った。同月はドック船が6カ統あり、対馬沖に10カ統、三陸、山陰沖に2カ統ずつが操業した。一方、陸上側の処理能力低下が課題だ。冷蔵庫はサバで満庫状態が続き氷も逼迫（ひっぱく）。1日の処理能力は松浦や唐津（佐賀県）をはじめ、大幅に落ち込んでおり、長崎、福岡の産地市場も低下している。このため、水揚量は冷蔵庫の収容力次第となっている。

【養殖・産地市況】 鹿児島産 養殖ブリ
1400円保合い 9月15日みなと新聞

鹿児島県内の養殖ブリ主要産地の中心浜値は9月上旬、前年同月と同価格のキロ1400円（中心サイズ3・3キロ）で推移する。販売サイズは例年より小型傾向となっている。現在販売中の同産地の養ブリは、比較的大型の人工種苗由来の魚が減り、小型の天然種苗由来の魚が多くなった。それに伴い販売の中心サイズは前月上旬から400グラム小型化した。販売は高めの相場から例年並みの軟調な動きとなっている。「今期は赤潮に伴う餌止めがあったことから販売サイズは当面、小型傾向になる」と産地筋。半面、輸出向け養殖が多い鹿児島湾北部は現在、赤潮の発生はない。

養殖マダイ 愛媛産 中心サイズ続伸 1030円 愛媛県産養殖マダイの9月上旬の産地相場は中心サイズ（1尾1・5キロ以下）は続伸し、大型サイズ（1・7キロアップ）は上昇した。中心サイズはキロ当たり1030円で、大型は1060円。引き合いの強い大型サイズは一部で1100円の値を付ける。赤潮による餌止めや高水温などによる成育遅れが総体的に見られる。供給量が若干の不足気味で、産地相場を押し上げる。荷動きは順調のようだ。不足気味に加え、養殖のブリやカンパチの相場が高値安定も要因の一つ。今後の相場は当面続伸。例年並みの出荷体制に戻る10月下旬以降に動きがありそうだ。

ただ、配合飼料の再値上げや、資材価格や人件費の上昇もあり、産地サイドは、すべてのサイズで10月下旬以降も1000円台をキープすると予想する。**養殖カンパチ 鹿児島産 1750円で横ばい** 鹿児島県の養殖カンパチの基準浜値は9月上旬、1750円（中心サイズ4キロ）と前月から動きがない。活魚限定で、同サイズを1800円で販売する傾向も変化なし。産地では現在、基準価格の若干の値上げを検討しているもよう。浜値について、産地筋は「今期新物の販売開始をめぐり、若干の値上げを検討している」。新物の販売開始時期については「昨年より2カ月遅い10月中を見込む」（産地筋）。同県八代海周辺では今期、大規模な赤潮被害があったが、同魚養殖場が集中する鹿児島湾は現在、赤潮発生はない。

【養殖・消費地市況】 豊洲市場 愛媛産品薄1300円前後、養殖マダイ高値張り付き9月15日みなと新聞

東京・豊洲市場では9月上旬、養殖マダイが依然として高値で張り付いている。野締めは近年、季節を問わずキロ1000円前後で推移していたが、9月の中心卸値は1300円ほどまで上がった。活締めも高値で推移する。ただし、入荷ペースについて卸は、「首都圏では底堅い需要があり、目立った落ち込みはない」と話す。高値の理由について、「主産地である愛媛で品薄感がある。池上げを控えている生産者もいるようだ」と卸。餌や資材にかかるコストの上昇も追い打ちとなっているという。「需要が高まる年末に向けて相場は下がらないだろう」とみる。養殖ブリ（ハマチ）は、昨年9月ごろに歴史的な高値を付けたが、その相場は現時点（9月上旬）でも崩れていない。「浜は強気の相場」と卸。その一方で、浜側からすると、採算面の観点から、相場を下げるのは困難であるようだ。養殖カンパチは9月上旬、前年並みかそれをやや上回る相場となっている。ある卸は「野締めでキロ2500円。野締めのフィレーでは3500円」と話した。

養殖ブリ 1700円維持 大阪本場 量販は刺身**のみ扱い**大阪本場における9月上旬の養殖ブリ

（産地締め）の中心相場は前月上旬比保合いのキロ1700円で推移している。主産地は高知、鹿児島。1尾当たりの平均サイズは3・7～3・8キロ。荷動きは前年並みだが、高値安定で、量販店では主に刺身商材としてのみ採用している。今後の相場は保合いか強含み。ただ、「値上げになれば、荷動きは鈍化する」と卸担当者は見通す。養殖ハマチ（活魚）は1850円で、ブリ同様保合いで推移している。主産地は徳島、愛媛。サイズは3キロ前後。高水温が影響し、品質の劣るハマチが多いようだ。外食向けが中心で、引き合いはわずかに低調。今後の相場はブリ同様、保合いか強含み。

国内生鮮大物 豊洲8月 天然クロマグロ入荷減
悪天候操業見合わせ続出 9月15日みなと新聞

時事通信社が集計した東京・豊洲市場8月の生鮮大物売り場、国内物のお荷本数は前年同月比34%減の746本だった。クロマグロの天然物と養殖物は減少したが、メバチとキハダは増えた。クロマグロ全体のお荷本数は前年同月比71・5%減の225本。このうち天然物は75・2%減の159本で、8月としては過去10年間で最少だった。巻網物が、イワシなど青物狙い船の混獲物とされる千葉・銚子産が6本（前年同月1本）のみに急減して、例年なら漁期後半でコンスタントな水揚げがある塩釜などの宮城産のお荷が途切れた（同263本）ことが大きく影響した。また、前年に8本あった北海道産もお荷がなかった。巻網以外でも、定置物を主体とする、噴火湾などの北海道産が97本（同237本）、釣物を主体とする小泊や大間の青森産が43本（同102本）と急減した。月間を通じて極めて低調な出回りとなった状況について、卸会社では「台風や前線の影響から各地で操業見合わせや漁薄が続いたため」と話している。

サイズ別のセリ値（発表値の平均）は、延縄や釣、定置物など巻網物以外の大型（1本100キロ以上）がキロ5771円で、前年同月比11・8%安。中型（100キロ未満40キロ以上）は5955円で10・9%安、小型（40キロ未満）は5115円と41・5%高だった。巻網物は大型のみで、2500円と46・3%安。月間の最高値は4日に入荷した北海道・噴火湾産の定置物（66キロ）で、中型サイズとして異例のキロ1万5000円だった。養殖クロマグロのセリ場売りは66本（前年同月147本）と55・1%減少した。主力の長崎産が13本（同108本）と大幅に減少したことが要因。この他、鹿児島産8本（同26本）、高知産4本（同9本）も前年を下回った。一方、三重産は34本（同3本）に増加。奄美産3本（同1本）、島根産3本（同なし）、京都・伊根産1本（同なし）なども少量ながら増加、お荷再開となった。セリ値は、三重産の36～50キロ物4本が珍しく公表され、キロ3000～2500円だった。なお、この他は未発表だったが、実勢取引価格は70キロ以上がキロ3800～3700円程度、50キロ以上が3600円前後、40キロ以下は3400～3300円程度のもよう。

メバチ3割増 宮城産伸びる メバチ全体のお荷本数は191本（同145本）と31・7%増加した。延縄物は、塩釜や気仙沼の宮城産が119本（同3本）に増加したが、和歌山・那智勝浦産は4本（同121本）と大幅に減少した。なお、今年は珍しくカツオ漁船の混獲物とされる巻網物のお荷がまとまり、千葉・房州勝浦産が40本（同なし）、塩釜産が16本（同なし）お荷してメバチ全体のお荷を押し上げた。延縄物のセリ値の平均はキロ2023円と37・1%高。巻網物のセリ値は1477円と7・7%安だった。なお、巻網物は珍しさもあって相場は伸びなかったが「身色がきれいでちゃんと使える魚」（有力仲卸）と評価は良かった。キハダは330本（前年同月196本）と68・4%増加した。

大半を占めた巻網物が急増したことが主な要因で、銚子産が167本（同75本）、房州勝浦産が151本（同なし）とまとまった。なお、三重・南島産は5本（同10本）と少なく、前年に77本あった宮城産も1本のみだった。延縄物は5本のみで、三宅島産が4本（同なし）、神奈川産が1本（同なし）と低調だった。

いけす迷い込んだ珍しいキハダ入荷 発表されたセリ値の平均は、巻網物がキロ1668円と65・1%高。競合する赤身系天然ミナミマグロの減少場面などで引き合いが高まり、上品にはキロ2000円前後の好値も付いたが、「身やけ」を懸念する慎重買いもありセリ残りも多かった。延縄物のセリ値の平均は、1260円と巻網物を下回った。なお、1本（35キロ）のみだが、高知産から養殖物が入荷した。クロマグロいけすに迷い込んだ例外的な生産魚らしく「脂のりはたいへん良い」（セリ参加者）と好評だったがセリ値は付かなかった。

【さかなの動き】シマホッケ 米国産 小型中心に値上げ基調 今後さらなる修正 9月15日みなと新聞

米アラスカ産シマホッケ（キタノホッケ）48尾サイズ（冷凍ドレス不定貫19キロ版）の内販キロ単価は9月上旬現在、約530円で推移する。世界的な魚全般の価格上昇を受け、70尾入りなど小型サイズを含め値上がり基調で、夏漁期物については今後、「さらに少し上がりそう」（商社筋）。一昨年には400～390円程度だった70尾サイズは現在、500円程度。全体にキロ単価が高まる中で、「1尾当たりの単価を下げるため、小型に人気が集まった。しかも個体の内訳が大型寄りとなってしまう、余計に（小型アソートが）取り合いとなった」（同）という。世界的に魚全般が値上がる中、残された数少ない大衆魚価格のシマホッケ。今年は産地側が売価向上を狙い、中国の燻製加工業者や欧州にPRしているという話が、複数筋から聞かれる。

現時点では「日本以外で大口の消費はなさそうで、夏漁期までは安定した入荷を見込むが、いつ他国需要が来るか」（同）という状態だ。商社筋からは、今のうちに「日本の加工業者には市場を拡大すべく、従来製品の販促に加えての新商品開発をお勧めしたい」との声もある。販路は漬け魚や煮魚、焼成品など多様に考えられる。

練り製品情報 全国生産7月 8カ月連続の増産
25年3万ト下方修正で 9月17日水経新聞

食品需給研究センターが発表した7月の全国チクワ・カマボコ類生産量は、前年同月比9・8%増の2万9057トンだった。当月から最新の「水産加工統計調査」に合わせて、昨年度実績がおおよそ1か月分に当たる3万トン下方修正された反動で大幅なプラスとなった。主要6品目のうち減産したものはなく、修正後の全体は8か月連続の増産。板カマボコ（2・9%増）こそプラスが小幅だったものの、このほかは総じて2ケタ近く増加した。特に主力の揚げカマボコ（12・3%増）は最大の伸び幅となり、次点のカニ風味カマボコなどを含むその他カマボコ（9・1%増）も順調で全体を押し上げた。

累計も9%増 1～7月の累計生産量は、9・2%増の23万928トン。すべての品目が前年超えて、その他カマボコ（11・7%増）やナルト・ハンペン（11・4%増）、チクワ（11・1%増）を筆頭に増加が目立っている。ただ2026年の数字はまだ速報値で、近年はこの時期に大幅な修正が頻発している。現状は増産が顕著だが、確報になるまではデータの取り扱いには注意が必要だ。

マグロ情報 豊洲8月 冷メバチ、1500円割れも下落限定的『気持ちばかりが焦る』 9月17日水経新聞

豊洲市場における8月の冷凍大バチ（40キロ上）上場本数は6758本で、前年同月から2267本（25%）減少した。営業日が1日多い7月からは142本少ない。

旧盆商戦に関して卸関係者は、「想定していたよりも悪くなかった」と話すが、高値で推移する冷凍マグロの動きが好転したといえるほどではない。旧盆需要が過ぎると再び販売不振ともいえる状況に舞い戻ったという。数量が最も多い西経・太平洋銘柄（3647本）の公表値キロ当たり中値の平均は1499円（30%高）で、7月の1506円から小幅安となった。旧盆を過ぎたあたりから1500円台を割ったが、下がり続けているのではなく1480円前後の水準を維持している。相場について関係者は、「もう少し売りやすい値段になってもらわないと厳しい」と口を揃える。「これまでが安過ぎた」との指摘もあるが、前年比3割高の単価で、これまで同様の消費を求めるのはやはり難しい。一方で、供給の先細りは避けられない。操業隻数のさらなる減少を食い止めるため、経費の高騰分を加味する必要性に認識は一致する半面、超低温冷蔵庫が満庫になっていることも伝わる。手持ち分をどのタイミングで放出するのか。あるいは年末商戦も見越して確保し続けるべきか。判断が難しく関係者は「気持ちばかりが焦る」と、悲痛な叫び声を上げている。

生鮮は輸入物が増加 国内の生鮮天然クロマグロは159本（75%減）で、8月としては過去10年で最少だった。宮城・塩釜のまき網が途切れた影響が大きい。定置網が主体の北海道産は97本（59%減）、釣り物が多い青森産が43本（58%減）など、主要産地で急減している。台風や低気圧の影響で操業を見合わせた時期・海域が多かったようだ。加えて今年の上半期は、2月を除いて月間2000本超のハイペースな入荷が続いた。高値が付く年末に向けて、漁獲枠を温存しているともいわれる。国内の品薄を受け、輸入数量が増加した。天然クロマグロは744本で、前年同月の2倍以上だ。主力のカナダ産が495本（87%増）になったほか、豪州産が前年同月の28本から123本へと急増している

サンマ漁やや回復 高値水準続き 販売は苦戦

9月17日水経新聞

【札幌】9月のサンマ漁は低調ながら、徐々に回復傾向にある。札幌市中央卸売市場では8月に比べ入荷が増え、価格も下がった。ただ、依然としてスーパーなど量販店の希望価格を上回り、需要は弱い状態が続いている。漁業情報サービスセンター（JAFIC）によると、15日現在の累計漁獲量（速報値）は前年同期比82・7%減の3351・5トン。9日夜以降の公海の漁場は、根室・花咲から東南東に約500キロ離れた北太平洋に形成され、花咲からの距離は8月の半分近くとなった。棒受網の大型船（100トン以上）1隻の一晩当たりの平均漁獲量は約4トンと、2～3トンほどだった8月に比べるとやや増加した。魚体は70～140グラムが中心で、100グラム以上が5～6割を占めるが、8月に比べ小型化が進んでいる。一方、主に10トン以上20トン未満の小型船が操業する日本水域では魚群が見つからず、漁獲があってもジャミが主体となっている。担当者は「サンマは徐々に南下しており、漁獲が本格化するのには9月末から10月になると思われる」と話した。札幌市場の生鮮サンマの入荷は、8月が2キロ箱が主体で、4キロ箱を含めて一日5000箱前後だった。9月は5000～1万箱に増加し、入荷は8月と同じ2キロ箱13～15尾入りの大型が主体となっている。価格はキロ1800～1400円と、8月の2500～2000円に比べ落ち着いた。ただ、卸の担当者は「スーパーなどの要望は1200～1000円で、まだ値段が乖（かい）離している」と指摘。「先月同様、厳しい状況が続いている」と話した。道内の小売店バイヤーも「今年は客の反応が鈍い」と指摘する。現在は4キロ箱30～38尾入りを中心に750～800円で仕入れ、店頭には3尾398円で並べている。バイヤーによると、客には小さいうえに高いと受け止められ、売れ行きが悪いという。仕入れ量は昨年の7割ほどに抑えており、「品揃えのために並べている状況だ」と話す。何度か特売を行ったものの、サイズが小さいため販売は振るわないといい、「水揚げが本格化するまでこの状況が続くのではないか」と話した。

サバ情報 ノルウェー 8月 漁期遅れで輸出量
減少単価は最高値圏続く 9月17日水経新聞

ノルウェー統計局によると、8月の冷凍サバ輸出量は前年同月に比べて58・7%少ない4774トンだった。月末から現地で大型船の水揚げが始まったが、昨年よりシーズン入りが遅れたことで数量は伸び悩んだ。一方、平均単価は26・3%高の46・6NOK（ノルウェークローネ）と依然として最高値圏にあるが、大きな変化はみられなかった。サイズ別では主力の600グラム未満が58・1%減の4475トン、大型の600グラム以上が65・3%減の299トンだった。単価は600グラム未満は26・8%高の46・5NOK、大型が20・9%高の48・7NOKと、主力は前月よりわずかに値上がりしたものの大型は若干の値下がりとなった。国別輸出先のトップは本国消費が伸びる中国で、単価は12・1%高の44・7NOKと高値にある中でも54・4%増の898トンと大きく伸びた。一方、次点はベトナムで31・1%高の45・5NOK、74・5%減の721トンと大幅減。全体3位の日本も10・7%高の44・1NOK、71・2%減の671トンにとどまった。

国内勢帰国も 現地漁はシケなどもあって停滞気味で、枠消化は4割超から進展はない。価格帯も内販換算でキロ1000円近辺と最高値圏のままで、国内勢はまだシーズン真ただ中にあるがリスクを嫌って買い付け量を落とし、早々に帰国する企業も出てきた。

台湾船大バチ 1400円保合い インド洋一船
買い 荷動き鈍く、搬入遅れ 9月16日みなと新聞

冷凍メバチ相場の指標となるインド洋台湾船一船買い相場は9月中旬現在、1本40キロ上の大バチはキロ1400円と5月から保合い。他サイズも大相場は先月から変わらない。大バチ以外の相場は25キロ上が1100円、15キロ上が900円、10キロ上が800円。キハダは25キロ上が1100円、15キロ上が900円、10キロ上が800円で推移する。大バチ相場は踊り場にあるものの、「赤身商材の荷動きはいぶい」と東京・豊洲卸。業界関係者によると、超低温冷蔵庫は庫腹が不足しており、搬入の遅れが懸念されている。

地中海マグロ搬入量 11%減 7月まで
庫腹不足で水揚げ遅れ 9月16日みなと新聞

地中海産を中心とした冷凍クロマグロフィレーの2025年シーズン（25年11月～）搬入量は7月末現在、前シーズン（24年11月～25年9月）11%減の2万3406トンで推移する。7月単月の搬入量は前年同月比8割減の263トン。国内超低温冷蔵庫の庫腹量が不足することから、搬入ペースが落ちたとみられる。韓国にある超低温冷蔵庫の活用が一般化した23年シーズン（23年11月～24年9月）以降、地中海クロマグロフィレーの搬入は9月までまとまる。過去2シーズンの7月輸入量は、24年が2512トン、25年が1342トン。シーズン全体の搬入量は前シーズン並みはありとみられるため、搬入が滞っていると考えられる。マグロの長期保管に必要な超低温冷蔵庫の庫腹量は不足している。関係者によると、庫腹不足から運搬船の水揚げに遅れが生じているもよう。カツオ・マグロ類全体の市況などへの影響が懸念されている。7月単体の輸入量は、スペインが158トンと全体の6割を占めた。主産地はその他、マルタが10トン、トルコが12トン、モロッコが18トンだった。

マグロ情報 三崎 8月 冷凍メバチ
最高値 1549円に 9月18日水経新聞

【三崎】三浦市三崎水産物地方卸売市場が公表した三崎魚市場における8月の冷凍メバチの平均単価は前年同月比33・8%高のキロ1549円で6月に付けた直近の最高値1509円を更新した。相場は2025年7月に1000円台に突入して以降、上昇基調が続いている。一方、取引数量は14・4%減の260・4トンにとどまり、単価は上昇に反比例して前年を下回る状態が続いた。一日当たりの平均上場本数は252本で、1か月の合計は10・3%減の4538本となった。7月の平均単価1470円から5・4%高と再び上昇に転じて高値が目立った。取引数量については7月の268・8トンと比較して3・1%減少した。1か月の上場本数は4387本から3・4%増で、三崎漁港への遠洋マグロはえ縄船の入港はなかった。